

## 追悼 「摩周ブルー」に魅せられた細川音治さん

佐藤 広行<sup>1</sup>・加藤 ゆき恵<sup>2</sup>

2022年1月27日、長らく道東の自然保護活動にも尽力された細川音治氏(享年85歳)が御逝去されました。細川音治氏は1936年(昭和11)年に弟子屈村(現:弟子屈町)に生まれ、環境省自然公園指導員、弟子屈町史編纂委員、北海道教育大学釧路校の非常勤講師などを歴任。1990年に北海道大学の植物園園長であった辻井達一教授の協力を得て、長年の植物観察の記録をまとめた『阿寒・摩周の植物』(北海道新聞社刊)を出版。1992年に環境庁自然局長賞、1994年に阿寒前田一歩園賞、2006年に環境大臣賞を受賞、2008年に藍綬褒章(自然保護功績)を受け、2009年には弟子屈町文化賞を受けられました。都合により札幌市(後に石狩市へ転居)に移住後は2013年には石狩市の緑地帯で日本一とも評されるオオバナノエンレイソウの大群落を発見し新聞紙面を飾る。長年採り溜めた植物標本を釧路市立博物館と北海道大学総合博物館に寄贈。そして2015年には周囲の誘いもあり、北大総合博物館の植物ボランティアとして活動されました。

そんな細川さんとの出会いは北大総合博物館の標本庫でのこと。寄贈された標本を標本棚に整理している時で、お互い自己紹介し、弟子屈の素晴らしい自然のこと、特に「蒼々」とした摩周湖の「摩周ブルー」のお話しをして下さったことが思い出されます。話が尽きず、お昼になってしまったので、「近くに美味しいラーメン屋があるから行こう」と誘われ、札幌駅周辺まで歩いて行くと思いきや「車で行くから」と車に乗せられ、約20分。不安になる程に思いのほか遠くのラーメン屋に連れられ、御馳走になったことが懐かしく思い出されます。その時に、お互い住んでいる所が近くであることが分かり、お互いに週に一度顔を合わせるのが楽しみとなっていきました。時には居酒屋で酒を交わし、時には細川さん宅にて酒宴を開き、細川さんからは道東でやってきた数多くの活動内容と、今後の展望を聞き、人当たりも良く面倒見も良い人物であったため、私は研究での悩みや人生相談などをした日々が愛おしく思い出されます。

2018年には弟子屈町教育委員会からの委託を受け、2人で念願の細川さんの故郷である弟子屈町へ植物調査に行くことが叶いました。弟子屈で細川音治を知らない者は無く、かつて細川さんら川湯の皆さんで誘致したという環境省阿寒摩周国立公園管理事務所、川湯エコミュージアムセンタ(現:川湯ビジターセンター)、各観光地のボランティアとして活動されている旧知の方達にお会いすると、誰もが頼るように細川さんに話かけていました。弟子屈町で活動されていた際に、どれだけ必要とされていたかを垣間見たひと時でした。

1 九州オープンユニバーシティ 研究員・九州大学総合研究博物館専門研究員  
2 釧路市立博物館

2019年には仕事での悩みをよく相談し、2020年には私が遠く九州へ異動することになった際も、不安に駆られる私を励ましてくださり、帰省の際には必ず一席を設けて遅くまで語り合ったのはつい最近のことです。残念ながら細川さんは立て続けに病に伏し、徐々に体からはかつての活力は失われてしまいましたが、そのような状態でも私のことを心配して下さり、そして最後まで故郷の自然を愛し、自然保護のために活動されていた姿は、目指すべき生き様であるように思います。

数多くの御恩に対して感謝の念に堪えません。細川音治さんのご冥福をお祈り致します。(佐藤)



2006年環境大臣賞授賞式

釧路市立博物館には、細川音治さんが採集された植物標本が63点収蔵されています。そのうち60点は1988~1990年に行われた阿寒湖周辺の前田一歩園財団所有山林の植物相調査で採集されたもので、2点は1960年代後半に採集された外来植物です。2点の外来植物は移入の初期に採集されたものと思われ、細川さんの観察眼の鋭さをうかがい知ることができます。細川さんのものを含め、植物収蔵庫の標本を守り後世に残していくという博物館職員としての役割を、これからも果たしていきます。(加藤)



摩周湖に乾杯